

島根大学ミュージアム年報

Annual Report of Shimane University Museum

平成18年度

2007.3

島根大学ミュージアム

Shimane University Museum

序 文

豊かな自然と歴史・文化遺産に恵まれた地にある島根大学では、生物学、地質学等標本を扱う自然科学や歴史学、考古学等の研究が伝統的に盛んであり、先輩の先生方が研究の過程で収集したり教育研究のために寄贈されたりした資試料が数多く蓄積されてきました。しかし、それらを保管、展示する施設がほとんど無かったために、教員が退官した後は行方不明になったり、捨てられてしまったりしたものも少なくありませんでした。

また、本学は、平成16年度から国立大学法人として発足しましたが、各大学に強く求められた個性化、差別化を実現するためのツールがあまり見あたらない・・・、これまで培ってきた教育や研究の成果を、本学が標榜する「地域に根ざした個性豊かな大学創り」に結びつけることがなかなかうまくいかない・・・、学生はもとより、教職員の多くもこの大学でどのような研究が行われ、教育によってどのような逸材が世に出て活躍してきたのかを知らない・・・といった状況でした。

こうした問題を具体的に改善するために、本学にユニバーシティ・ミュージアムを設置する機運が高まっていたところ、学内外のご理解・ご支援が稔り、平成18年度から島根大学ミュージアムを発足させることができました。

このミュージアムは、ミュージアム本館を核に、山陰地域・汽水域資料展示室、古代出雲文化資料調査室、附属図書館、同窓会連合会展示コーナー、ミニ学術植物園等、各部局の既存の個別展示収蔵施設をネットワーク化して、資料の研究・管理、キャンパスツアーや博物館教育等の教育普及に活用するものです。

発足初年度で、まだ手探り状態ではありますが、大学ミュージアムの活動が大学と地域との架け橋になり、地域の文化創生に少しでも寄与できるよう、ミュージアム教職員一同、邁進していく所存です。皆様のご指導・ご教示を何卒お願い申し上げます。

平成19年3月

島根大学学術国際担当副学長

島根大学ミュージアム館長 高 安 克 己

目 次

I 沿革	
1 島根大学ミュージアム発足に至る経緯	1
2 島根大学ミュージアム（仮称）設置要項（案）	1
II 規則・組織	
1 規則	8
2 組織	11
(1) 組織構成と構成員	
(2) 管理運営委員会	
(3) 専門委員会	
III 活動報告	
1 主な活動日誌抄	13
2 標本資料類等の収集、整理・保管、調査研究	14
(1) 標本資料類等の収集	
(2) 標本資料類等の整理・保管	
(3) 標本資料類等の調査研究	
3 標本資料類等に関わる教育、普及啓発	15
(1) 展示活動	
(2) 講義	
4 博物館学教育	18
5 標本資料類等に関わる情報発信、地域貢献	18
(1) 刊行物の発行	
(2) 新聞連載	
(3) インターネット	
(4) 地域貢献活動	
6 本学構内の埋蔵文化財の取扱い	22
(1) 島根大学構内遺跡第15次調査（竹崎地区1）	
(2) 島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査	
(3) 島根大学構内遺跡第14・15次調査、島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査の整理・研究	
7 その他	25
(1) 島根大学旧奥谷宿舎保存活用検討ワーキンググループ	
(2) しまねミュージアム協議会・国立大学博物館等協議会への参加	
8 ミュージアム教員の活動記録	26
(1) 会下和宏	
IV 島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）について	
1 はじめに	27
2 建築について	27
(1) 島根大学旧奥谷宿舎の特徴	
(2) 大正時代の住宅建築	
(3) 外国人宿舎建築の経緯	
3 居住者について	30
(1) ウィルヘルム・プラーゲ博士	
(2) フリッツ・カルシュ博士	
4 おわりに	31

I 沿革

1 島根大学ミュージアム発足に至る経緯

日本海側西部に位置し、個性的な歴史・文化・自然資源に恵まれたフィールドにある島根大学では、かねてから研究・教育の過程で収集された標本類を活用する附属博物館の設置が待望されてきた。

ミュージアムの前身組織である埋蔵文化財調査研究センターでは、平成17年3月の埋蔵文化財調査研究センター管理運営委員会において、「埋蔵文化財調査研究センター改組による『島根大学キャンパスミュージアム（仮称）』構想について」を提案し、承認された。

これをうけて、平成17年5月11日の第27回役員会において、「島根大学キャンパスミュージアム（仮称）設置検討委員会」の設置が認められ、その後7回の審議を経て、次節に示す「島根大学ミュージアム（仮称）設置要項（案）」を策定、学長に答申した。

平成17年12月7日の第39回役員会をはじめ、12月12日の第21回教育研究評議会等においてこれが承認され、平成18年1月、「島根大学ミュージアム設置準備委員会」が発足、3回の協議を重ね、規則作成等設置準備に必要な事項を審議した。

こうした経緯を経て、平成18年4月1日から、いよいよ島根大学ミュージアムが発足した。

2 島根大学ミュージアム（仮称）設置要項（案）

平成17年度、島根大学キャンパスミュージアム（仮称）設置検討委員会によって「島根大学ミュージアム（仮称）設置要項（案）」が策定され、学長に答申された。以下にその内容を再録する。

*

島根大学ミュージアム（仮称）設置要項（案）

島根大学キャンパスミュージアム（仮称）設置検討委員会

本委員会は、現在の島根大学埋蔵文化財調査研究センターを改組して設置する「島根大学ミュージアム（仮称、以下「ミュージアム」という。）」の基本構想策定を付託され、7回の審議を重ねてきた。本設置要項（案）は、この審議結果をまとめ、以下に提言するものである。

目次

1. ミュージアム設置の必要性
2. 基本理念
3. 目的
4. 基本的性格
5. 主な機能と中長期的活動項目
6. 場所・施設
7. 組織
8. その他

1. ミュージアム設置の必要性

本学では、以下にあげる主な理由から、現在の埋蔵文化財調査研究センターを改組して、ミュージアムを設置する必要性が生じている。

(1) これまでの埋蔵文化財調査研究センター

埋蔵文化財調査研究センターは、文化財保護法（昭和25年法律第214号）を順守して、永年にわたり、大学構内遺跡の調査研究、出土遺物の保管・陳列等の活動を継続している。センター展示室は、平日のほか、予約があれば休日も開館しており、例えばオープンキャンパス・学園祭等では、学外の一般市民・受験生等が数多く見学する等、好評を博しているところである。また、当センター教員によって、所蔵資料を教材にした学芸員養成のための博物館教育もなされている。

大学構内遺跡の調査研究業務は今後とも継続していく見込みだが、島根大学中期目標の「開かれた大学」・「地域とともに歩む大学」を実現するような、より幅広い活動を打ち出していくためには、当センター既存機能の枠内にとどまる従来通りの活動だけでは限界が生じてきている。

(2) 本学所蔵の有形知的財産の活用

本学には、埋蔵文化財調査研究センター所蔵資料以外に、山陰各地の考古資料・歴史資料、自然科学諸分野の各種学術標本、古地図、学校教科書、古典的実験機器・医療機器、松江高等学校・島根師範学校・島根青年師範学校・島根県立島根農科大学・島根医科大学等の学校史に関する資料をはじめ、膨大・多岐の学術標本資料類・試作品等が、分散的に所蔵されている。これらの部分的な陳列活動は、埋蔵文化財調査研究センター、汽水域研究センター展示室、法文学部考古学研究室、附属図書館等で個別におこなわれてきた。

また、本学所蔵の考古資料情報については、「島根県遺跡データベース（島根大学地域貢献推進協議会・遺跡データベース分科会制作）」でインターネット公開され、25万件以上のアクセスがある等、大学がもつ学術標本閲覧に対する市民の潜在的ニーズには大きいものがある。

しかし、こうした資料のほとんどが各部局に分散して保管され、これらを全学的・横断的に把握し、活用する組織の設置が、永年、学内外から待望され、急務となっていた。

(3) 地域の文化行政や法人化した大学運営への寄与

平成17年度から文化財保護法が一部改正され、文化的景観、近代文化遺産等も保護対象とされる等、既存の定義では十分捉えられてこなかった多様な文化財が、ますます重要視されてきている。また、文部科学省・文化審議会文化政策部会が、平成17年2月にまとめた「地域文化で日本を元気にしよう！」と題した報告書のなかでは、大学が、国、自治体、住民、文化芸術団体、企業等と連携しつつ、地域文化の振興に組織的に参画していく必要性をうたっている。

前述の本学中期目標「開かれた大学」・「地域とともに歩む大学」はこうした地域の文化振興行政等とも密接に関連しており、これを具体的に実現していくには、大学ミュージアム施設が大きな役割を果たすことができる。既に、中国地方のほか、全国の国立大学法人でも、大学運営における重要なセクションとして、こうした施設が設置される趨勢にある。

2. 基本理念

本学は、環日本海地域・山陰地域に位置し、宍道湖・中海、島根半島、出雲平野、隠岐諸島等の豊かで個性的な自然資源に恵まれた立地環境にあり、こうしたフィールドに根ざした研究によって多くの標本資料類等が蓄積されてきた。

また、埋蔵文化財調査研究センターによる大学構内遺跡の発掘調査研究によって、本学松江キャンパスが、はるか7000年以上前の縄文時代から近世松江藩・近代島根県の時代まで、人類の営みの痕跡を刻んできたことが分かってきた。さらに、出雲キャンパスの周辺には、全国的にも著名な弥生遺跡・古墳、「出雲国風土記」にも記載がある奈良時代の遺跡等が豊富に残されている。

また、本学は、その前身である、小学教員伝習所（明治8年設置）～島根師範学校、島根県立実業公民学校教員養成所（昭和8年設置）～島根青年師範学校、松江高等学校（大正9年設置）、島根県立益田農林学校（大正10年設置）～島根県立島根農科大学、国立島根大学（昭和24年設置）、国立島根医科大学（昭和50年設置）等の長い歴史・伝統を有し、近代国家の成立から21世紀の今日に至るまで、島根県はもとより日本の高等教育・研究の地域拠点として、多くの人材を輩出する等、きわめて重要な役割を果たしてきた。

本学では、そうした自然・歴史・文化環境のなかに生まれながら高等教育・研究が実践され、数多くの実績があげられてきた。そこで蓄積されてきた標本資料類等は、いわば大学の歴史とも相即不離の関係に

ある。

このミュージアムは、こうして蓄積されてきた標本資料類等を有形知的財産として保護・活用するとともに、本学先人の業績を顕彰し、学生・地域市民・同窓生・教職員等の本学への理解・誇り・愛着の醸成を助け、「開かれた大学」・「地域社会とともに歩む大学」の構築や本学の未来への躍進に寄与するために設置・運営するものである。

3. 目的

ミュージアムは、永年にわたって収集・蓄積されてきた本学における標本資料類等を大学所有の有形知的財産として位置づけ、それらを収集、整理・保管、調査・研究したうえで、展示公開等による教育普及、情報発信の促進、地域貢献等を行うことを目的とする。

また、総合大学である本学の様々な研究室で行われてきた過去・現在の膨大な研究成果、これからの研究展望等を一般市民に分かりやすく情報発信し、社会に開かれた大学の創造を目指す。

さらに、本学の前身校も含めた長い学校史を調査研究し、これまでの著名な教員・卒業生の顕彰等を行い、個性的な学風をもつ大学の創造に寄与する。

4. 基本的性格

欧米や東アジア等の諸外国では、大学の設置要件として、附属図書館とともに附属博物館の設置が義務付けられ、標本資料類等を大量に保管・整理し、学術研究のほか、社会教育においても重要な役割を果たしてきた。近年、日本でも大規模国立大学や地方大学において全国的に様々な大学博物館の設置計画が立案され、次々に具体化されている趨勢にある。

本学ミュージアムは、こうした世界・全国の動向を重視しつつ、本学の実情に即して、現埋蔵文化財調査研究センターの役割を継承発展させる形で発足させ、さらに以下のような特徴あるものとしていく。

(1) 「大学まるごとミュージアム」のコンセプト

概念上、本学構内（松江・出雲キャンパス、附属農場、演習林等）の屋内・屋外全体をまるごと博物館として位置付け、ネットワーク化によって活用をはかる。さらに、キャンパス周辺にある遺跡、古墳、城下町、自然・文化遺産等をも博物館資源として積極的に取り込んで、例えば見学ルートに組み込む等の活用をする。

(2) 大学と社会との「インターフェイス」的役割

「開かれた大学」の構築を实践するために、学内の標本資料類等の公開のほか、研究・教育内容等を社会に分かりやすく紹介する等、いわば大学と社会との「インターフェイス」的役割を担う。

(3) 地域を重視した運営

地域社会に根ざした運営を行ない、県内の各種博物館・センター・学校・教育委員会等との密接な連携・交流をはかる。

(4) 学内外人材の積極的活用

「大学まるごとミュージアム」のコンセプトのもとに、本学教職員一人ひとりが学芸員としての意識をもち、それぞれの専門性を生かして、運営に関与してもらう。また、退職教員や学外の関係する人材、市民・学生ボランティアを積極的に活用する。

(5) 情報技術の積極的活用

学内関連部局と連携をはかりながら、ホームページ、データベースを構築・更新し、デジタル化した情報を積極的に発信する。

5. 主な機能と中長期的活動項目

(1) 標本資料類等の収集

- ・ 標本資料類・学校史に関する資料等の収集
- ・ 標本資料類等の移管・寄贈による受入れ

(2) 標本資料類等（情報）の整理・保管・管理

- ・ ミュージアム本館所有標本資料等（鳥根大学構内遺跡出土遺物等）の整理・保管・管理

- ・各部署等全学の所有標本資料類等の情報の把握・整理
- ・標本資料類等の保全・復元・修復・劣化防止
- (3) 調査・研究
 - ・標本資料類等の調査・研究
 - ・本学構内埋蔵文化財の発掘調査・研究
 - ・学校史・本学過去の著名研究者・出身者等に関する調査・研究
- (4) 標本資料類等に関わる教育普及（展示等）・情報発信・地域貢献ほか
 - 展示活動
 - ・標本資料類等の展示企画と一般公開（将来的に学外・県外でのサテライト展示も構想）
 - ・キャンパスツアー等によるキャンパス内研究室・展示施設等や周辺にある屋外資料の解説案内（子ども、受験生、市民向け）
 - ・学校史資料展示スペースの整備・公開
 - ・オープンキャンパス等での解説案内
 - ・将来的に、一元的な常設・企画展示室・収蔵室の整備
 - ・キャンパス内の樹木に樹木名称プレート設置
 - ・キャンパス内でのミニコンサートの開催
 - 博物館学教育・社会教育等
 - ・博物館学関連（学芸員養成コース）講義・実習の実施
 - ・一般教養講義・公開講義「島根大学ミュージアム学（仮称）」の開講
 - ・標本資料類等を用いた小中高校における「出張授業」の実施
 - ・他施設とも連携した公開講座・講演会の開催等による普及啓発事業・社会人教育
 - 情報発信・大学宣伝
 - ・標本資料類等情報のデータベースの構築・公開
 - ・ホームページ（インターネット博物館）の整備・更新
 - ・ニュースレター、ミュージアムガイドブック、パンフレット、『年報』等の刊行
 - ・「ミュージアム・ロード」に統一デザインの案内板設置
 - ・「ミュージアム・コアゾーン」の整備…ベンチ、彫刻の設置等
 - 地域貢献等
 - ・標本資料類等を用いた産学連携、教育研究新領域創成の試行

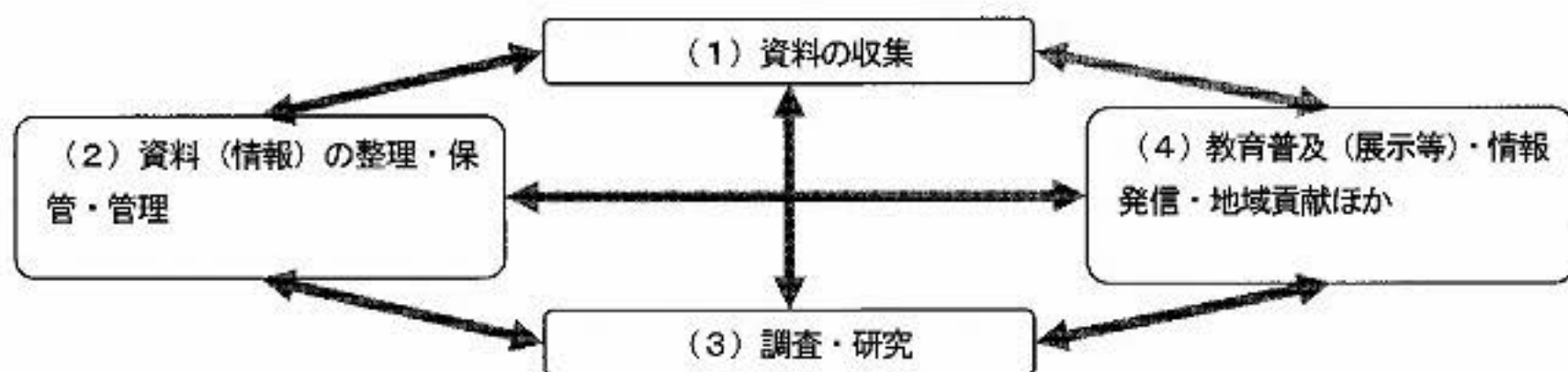


図1 島根大学ミュージアムの主な機能

6. 場所・施設

ミュージアムは、「大学まるごとミュージアム」というコンセプトをもつことから、その場所は、島根大学構内（松江・出雲キャンパス、附属農場、演習林等）の屋内・屋外全体を包括している。さらに、概念上は、キャンパス周辺にある遺跡・古墳、城下町、自然・文化遺産等（表1）をも博物館資源として掘り起こし、包摂するものである。

屋内展示・収蔵施設は、将来的には、標本資料類等を一元的に集約管理した展示公開施設の設置が望まれるが、当面は、各部署が管理する既存の個別展示・収蔵施設（表2）をネットワーク化し、総体として活用をはかることで対応する（図1）。

また、出雲キャンパスについても、将来的に、展示室を設ける方向で検討する。

こうしたネットワークの中核施設として、現埋蔵文化財調査研究センター建物を「ミュージアム本館」とし、専任教職員を常置させる。

7. 組織

(1) 管理運営委員会・専門委員会

ミュージアムは、全学共同の教育研究施設として、館長のもとに管理運営委員会が運営の責任を持ち、この下位にある専門委員会が実際的な運営を行なう（図3）。

管理運営委員会 ミュージアムの基本方針、主要な行事、予算・決算の決定等の事項を審議する。

専門委員会 大学構内埋蔵文化財調査研究業務について審議する埋蔵文化財専門委員会のほか、例えば展示活動、データベース構築等、ミュージアム諸業務の専門的事項に応じて設置し、館長、副館長、専任教員、兼任研究員等を中心に組織する。

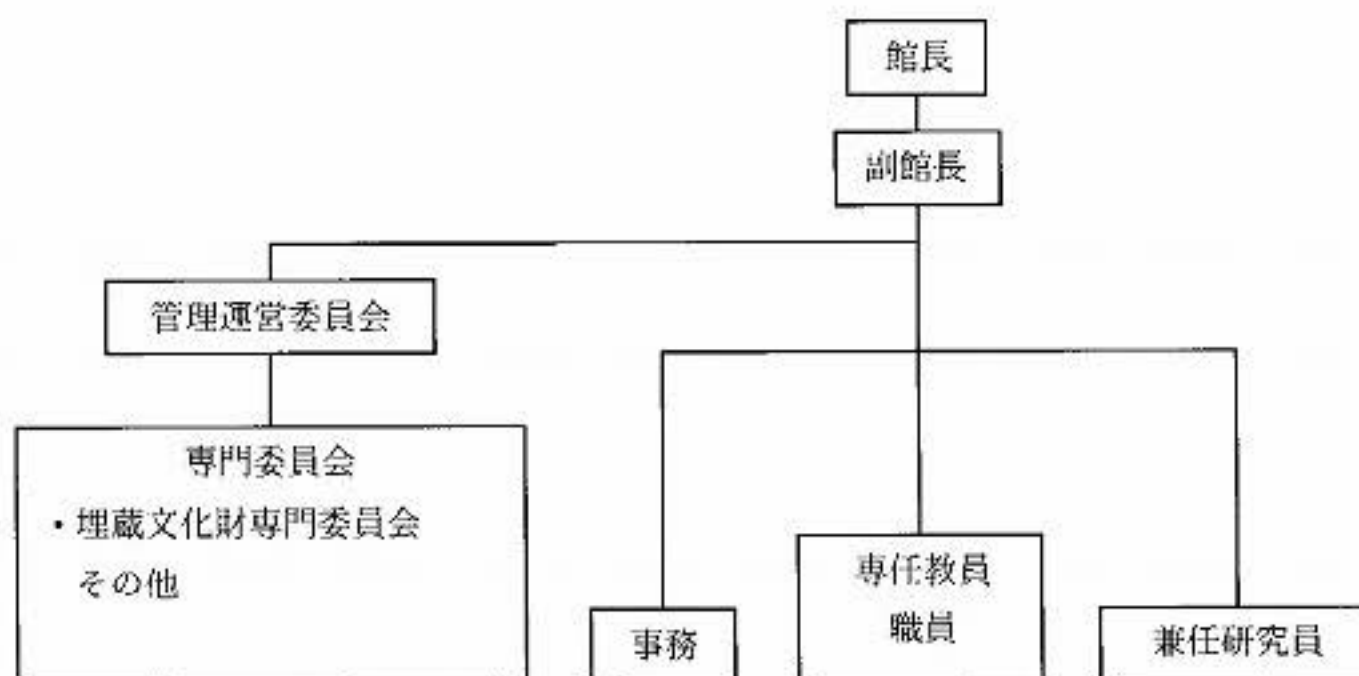


図3 組織図

(2) 組織

館長 学長が指名する副学長をもって充て、ミュージアムの業務を掌理する。

副館長 館長を補佐し、ミュージアムの業務を整理する。

専任教員 ミュージアムの専門的諸業務を遂行する。主要な業務の一つである本学の埋蔵文化財調査研究・修復保存に当たる「調査員」を兼ねる。

兼任研究員 それぞれの専門分野を生かしてミュージアムの諸業務に携わる学内の兼務教員で、各専門委員会を構成する委員となる。

職員 専任教員の指揮の下に、ミュージアム諸業務の遂行を補助する。主要な業務の一つである本学の埋蔵文化財調査研究・修復保存に当たる「調査補助員」を兼ねる。

この他、必要に応じて学外協力研究員や市民・学生ボランティア組織等を置き、学内外の人材を活用する。

(3) 現在の埋蔵文化財調査研究センターと新しいミュージアムとの関係

埋蔵文化財調査研究センター調査員がミュージアム専任教員、埋蔵文化財調査研究センター研究員がミュージアム兼任研究員として、その役割を継承し、業務を遂行する。

また、現在の埋蔵文化財調査研究センター管理運営委員会はミュージアム管理運営委員会、埋蔵文化財調査研究センター会議は埋蔵文化財専門委員会がその役割を継承する。埋蔵文化財専門委員会は、館長、副館長、専任教員、埋蔵文化財の専門的知識を有する兼任研究員を中心に組織する。

8. その他

(1) 将来構想

将来的には、附属図書館、総合情報処理センター等の学内関連部局との密接な連携が可能となるような組織体制を整備する必要がある。

(2) ミュージアムと各部局との関係について

各部局に收藏されている資料のうち、日常の教育研究に活用されているものを一元的にミュージアムで收藏保管すると業務に支障を招く恐れがある。その場合は、実情に即して、どのような資料がどこに收藏されているのかといった資料情報のみをミュージアム本館で集中管理するという、図4のような関係をとることとなる。

(3) 他の博物館との連携

博物館協議会等の会議に参加し、他の博物館施設、大学博物館等と密接に交流する。

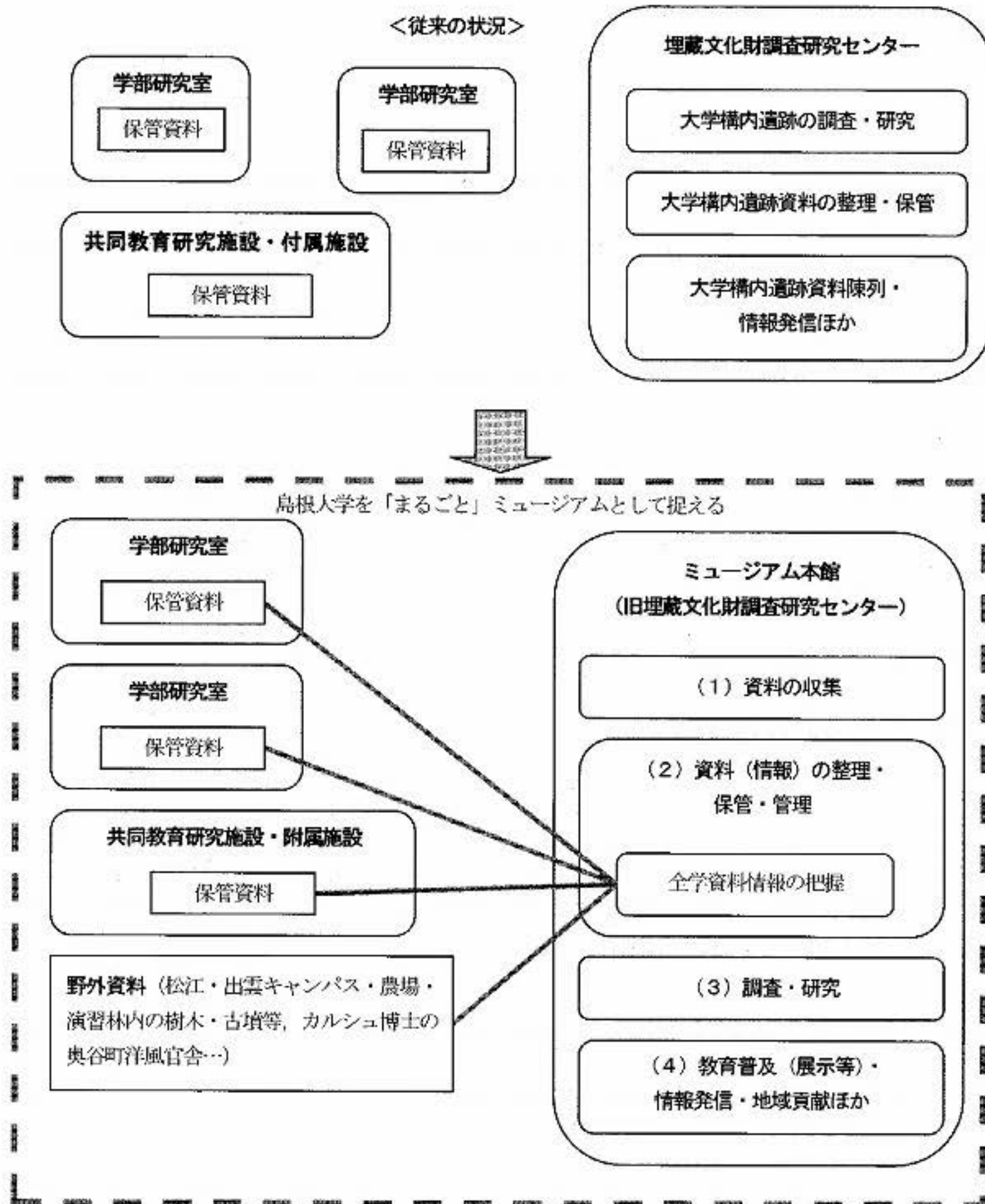


図4 鳥根大学ミュージアム概念図

Ⅱ 規則・組織

1 規則

島根大学ミュージアム規則

(平成18年島大規則第9号)

(平成18年3月8日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、島根大学ミュージアム（以下「ミュージアム」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 ミュージアムは、学内共同教育研究施設として、島根大学（以下「本学」という。）における標本資料類等を大学所有の有形知的財産として位置づけ、それらを収集、整理・保管及び調査研究をしたうえで、展示公開等による教育、普及啓発、情報発信の促進及び地域貢献等を行うことを目的とする。

(業務)

第3条 ミュージアムは、次の各号に掲げる業務を行う。

- 一 標本資料類等の収集、整理・保管及び調査研究に関すること。
- 二 標本資料類等に関わる教育及び普及啓発に関すること。
- 三 博物館学教育に関すること。
- 四 標本資料類等に関わる情報発信の促進及び地域貢献に関すること。
- 五 本学構内の埋蔵文化財の取扱いに関すること。
- 六 その他ミュージアムの目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 ミュージアムに、次の各号に掲げる職員を置く。

- 一 館長
- 二 副館長
- 三 専任教員
- 四 その他必要な職員

2 ミュージアムに兼任研究員及び学外協力研究員を置くことができる。

(館長)

第5条 館長は、学長が指名する副学長をもって充てる。

2 館長は、ミュージアムの業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、本学の専任教授のうちから、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の推薦に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

3 副館長は、館長を補佐し、ミュージアムの業務を整理する。

(専任教員)

第7条 専任教員は、第3条に掲げられた事項に関し専門的知識又は相当な経験を有する者とする。

2 専任教員の選考は、教育研究評議会の議を経て学長が行う。

(兼任研究員)

第8条 兼任研究員は、ミュージアムの業務に関して専門的知識を有する者で、全学的立場からミュージアムの業務を推進する者とする。

- 2 兼任研究員は、本学専任教員のうちから、館長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 館長は、前項の推薦に当たっては、当該教員が所属する部局等の長の同意を得るとともに、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の議を経なければならない。
- 4 兼任研究員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(学外協力研究員)

第9条 学外協力研究員は、ミュージアムの業務に関して専門的知識を有する学外の者で、ミュージアムの業務推進に協力する者とする。

2 学外協力研究員は、第10条に規定する島根大学ミュージアム管理運営委員会の議を経て、館長が委嘱する。

3 学外協力研究員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営委員会)

第10条 ミュージアムに関する基本的事項を審議するため、島根大学ミュージアム管理運営委員会(以下「管理運営委員会」という。)を置く。

2 管理運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 ミュージアムの事務は、財務部施設企画課、学術国際部社会・国際連携課及び学術国際部図書情報課の協力を得て、学術国際部研究協力課において処理する。

(雑則)

第12条 この規則に定めるもののほか、ミュージアムに関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成18年4月1日から施行する。
- 2 島根大学埋蔵文化財調査研究センター規則(平成16年島大規則第162号)は、廃止する。

島根大学ミュージアム管理運営委員会規則

(平成18年島大規則第10号)

(平成18年3月8日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、島根大学ミュージアム規則(平成18年島大規則第9号)第10条第2項の規定に基づき、島根大学ミュージアム管理運営委員会(以下「管理運営委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 管理運営委員会は、島根大学ミュージアム(以下「ミュージアム」という。)に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。

- 一 管理運営の基本方針及び事業計画に関すること。
- 二 本学構内の埋蔵文化財の取扱いに関すること。
- 三 副館長の推薦に関すること。
- 四 教員の人事(資格審査を含む)に関すること。
- 五 予算及び決算に関すること。
- 六 その他ミュージアムの管理運営に関すること。

(組織)

第3条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 館長
- 二 副館長
- 三 ミュージアムの専任教員
- 四 各学部教員代表 各1名

五 附属図書館長

六 総合情報処理センター長

七 生涯学習教育研究センター長

2 第1項第4号の委員は、学部長の申出に基づき、学長が任命する。

3 第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4 管理運営委員会に委員長を置き、委員長は館長をもって充てる。

(会議)

第4条 管理運営委員会は、委員長が招集し、議長は委員長をもって充てる。

2 委員長に事故があるときは、副館長がその職務を代理する。

3 管理運営委員会は、委員の3分の2以上が出席しなければ会議を開くことができない。

4 管理運営委員会は、出席者の過半数をもって議決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

5 管理運営委員会が必要と認めたときは、管理運営委員会に委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第5条 管理運営委員会に専門的事項を審議するため、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、管理運営委員会が別に定める。

(事務)

第6条 管理運営委員会の事務は、財務部施設企画課、学術国際部社会・国際連携課及び学術国際部図書情報課の協力を得て、学術国際部研究協力課において処理する。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

島根大学ミュージアム専門委員会内規

(平成18年4月28日制定)

(趣旨)

第1条 島根大学ミュージアム管理運営委員会規則第5条第2項の規定に基づき、島根大学ミュージアム専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(専門委員会)

第2条 専門委員会に次の各委員会を置く。

一 埋蔵文化財専門委員会

- ・埋蔵文化財の発掘調査・試掘調査・確認調査・工事立会に係る基本計画に関すること。
- ・埋蔵文化財の修復保存に係る基本計画に関すること。
- ・その他埋蔵文化財に関する事項

二 普及啓発専門委員会

- ・シンポジウム、研究会、公開講座等の企画及び実施
- ・ニュースレター、広報等の編集・刊行
- ・その他普及啓発に関する事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 館長

二 副館長

三 ミュージアムの専任教員

四 ミュージアム兼任研究員のうちから若干名

2 第1項第4号の委員は、館長の推薦に基づき、学長が任命する。

3 第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 専門委員会に委員長を置き、委員長は館長をもって充てる。

(会議)

第4条 専門委員会は、委員長が招集し、議長は委員長をもって充てる。

2 委員長に事故があるときは、副館長がその職務を代理する。

附 則

1 この内規は、平成18年4月26日から施行する。

2 この内規施行後、実状に即して内規を変更することができる。

2 組織

(1) 組織構成と構成員

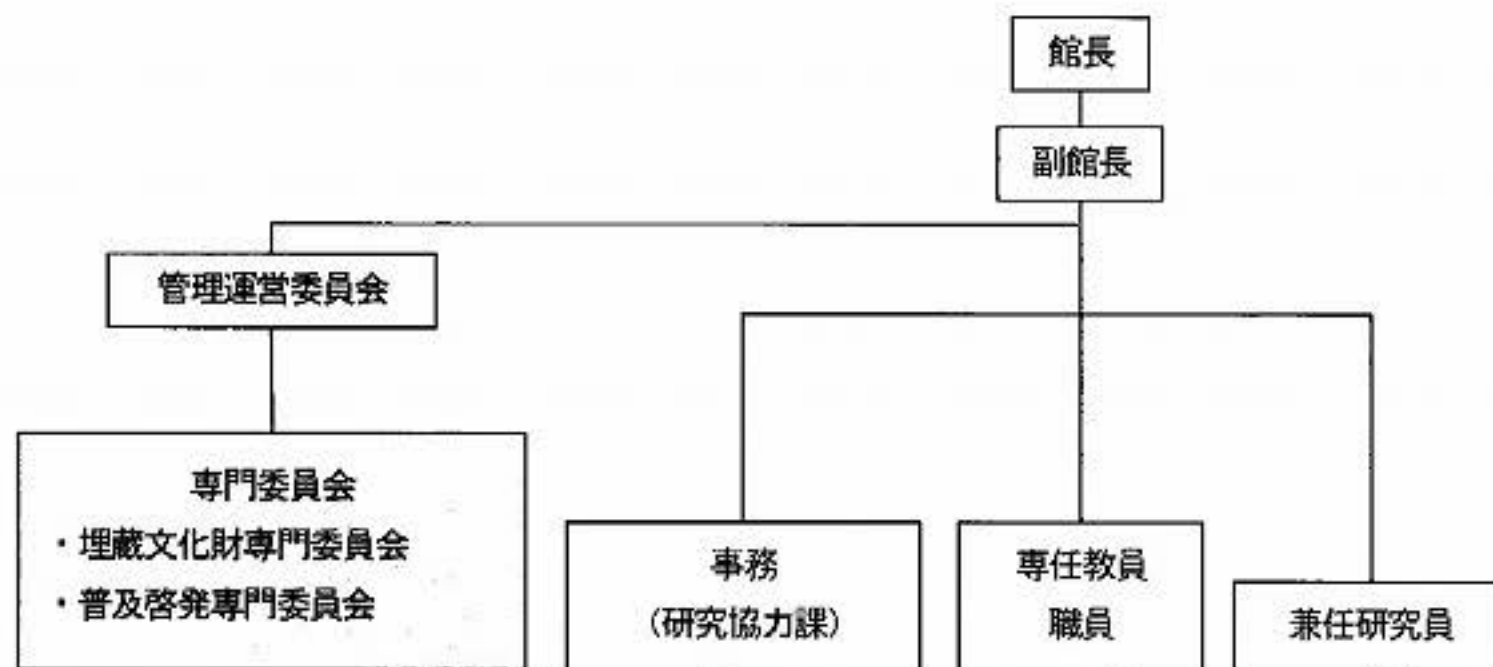


図5 ミュージアムの組織図

館長	学術国際担当副学長	高安 克巳
副館長	法文学部	渡邊 貞幸
専任教員		會下 和宏
兼任研究員	法文学部	大橋 泰夫
	法文学部	山田 康弘
	法文学部	船杉 力修
	法文学部	小林 准士
	法文学部	西田 兼
	教育学部	林 正久
	教育学部	大谷 修司
	医学部	小林 裕太
	総合理工学部	三瓶 良和
	総合理工学部	酒井 哲弥
	生物資源科学部	片桐 成夫
	生物資源科学部	秋吉 英雄
職員	研究協力課	田中 浩子 (平成18年9月から育児休暇)
		高須 佳奈 (平成18年9月から)

(2) 管理運営委員会

委員長	ミュージアム館長・附属図書館長	学術国際担当副学長	高安 克巳
委員	ミュージアム副館長	教授	渡邊 貞幸
	ミュージアム専任教員	助手	會下 和宏
	法文学部	教授	大日方克己
	教育学部	教授	相良 英輔
	医学部	教授	安井 幸彦
	総合理工学部	教授	横田修一郎
	生物資源科学部	教授	松野 煒
	総合情報処理センター長	教授	平川 正人
	生涯学習教育研究センター長	教授	春日 邦宣

(3) 専門委員会

埋蔵文化財専門委員会

委員長	ミュージアム館長	学術国際担当副学長	高安 克巳
委員	ミュージアム副館長	教授	渡邊 貞幸
	ミュージアム専任教員	助手	會下 和宏
	法文学部	教授	大橋 泰夫
	法文学部	助教授	山田 康弘
	教育学部	教授	林 正久
	総合理工学部	教授	三瓶 良和
	総合理工学部	助教授	酒井 哲弥
	生物資源科学部	教授	片桐 成夫

普及啓発専門委員会

委員長	ミュージアム館長	学術国際担当副学長	高安 克巳
委員	ミュージアム副館長	教授	渡邊 貞幸
	ミュージアム専任教員	助手	會下 和宏
	法文学部	助教授	船杉 力修
	法文学部	助教授	小林 准士
	法文学部	助教授	西田 兼
	教育学部	教授	林 正久
	教育学部	教授	大谷 修司
	医学部	教授	小林 裕太
	総合理工学部	教授	三瓶 良和
	総合理工学部	助教授	酒井 哲弥
	生物資源科学部	助教授	秋吉 英雄

Ⅲ 活動報告

1 主な活動日誌抄

平成18年

- 4月26日(水) 第1回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 4月29日(土) 法文学部歴史専攻の学生に、奥谷町洋風官舎内部を案内。
- 5月17日(水) ミュージアム発足式開催。
- 5月22日(月) 教育学部大谷教授から、師範学校の標本資料等を受け入れる。
- 5月29日(月) 生物資源科学部開講「森林利用史」で出張授業。本館展示室に移動し、学生50名が見学。
- 5月30日(火) 附属農場から、昭和11年「清水及衛執筆の額(筆書)」を受け入れる。
- 6月8日(木) 第2回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 6月15日(木) 「しまねミュージアム協議会」に参加。
- 6月22日(木)～23日(金) 国立大学博物館協議会・博物科学会(北海道大学)に出席。
- 6月26日(月) 第3回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 7月7日(金) 第1回キャンパスツアーの実施。
- 7月10日(月) 教育学部林正久教授から、南極岩石標本・地図類を受け入れる。
- 7月31日(月) ニュースレター『SHIMADAI MUSE』Vol.1を発行。
- 8月3日(木)～4日(金) オープンキャンパスで60名が見学。
- 8月4日(金) 教育学部大谷教授から、宍道湖珪藻資料等を受け入れる。
- 8月18日(金) 中国寧夏大学の学生13名が見学。
- 8月25日(木)・26日(金) 「親子でめぐる夏休み島大探検」の実施。12名・10名。
- 9月20日(水) 石見養護学校の生徒達30名が見学。
- 9月20日(水) 第4回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 9月21日(木) 埋蔵文化財専門委員会開催。
- 9月24日(日) 川津公民館の市民26名が見学。
- 10月7日(土)～8日(日) 学園祭で78名が見学。
- 10月10日(火) 大東高校生徒47名が汽水域・山陰地域資料展示室を見学。
- 10月11日(水)～26日(木) 島根大学構内遺跡第15次調査実施。
- 10月19日(木) 埋蔵文化財専門委員会(島根大学構内遺跡第15次調査現場での検討会)。
- 10月23日(月) 普及啓発専門委員会開催。
- 10月24日(火) 第5回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 10月25日(水) ニホンアシカ剥製標本の搬出。東京藝術大学大学美術館へ。
- 11月4日(土)～12月17日(日) 東京藝術大学大学美術館「The Wonder Box-ユニバーシティ・ミュージアム合同展」の参加。
- 11月3日(金)・11日(土) 公開講座「島根まるごとミュージアム体験ツアー」の実施。
- 11月6日(月) 安来市高広クラブの市民18名が見学。
- 11月7日(火) 第6回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 11月14日(火) 大社高校生徒41名が見学。
- 11月16日(木) FM山陰でのミュージアム紹介を収録。
- 11月28日(火) 「同窓会連合会」展示コーナーでの展示協力。
- 12月6日(水) 島根大学教職員組合女性部7名が見学。
- 12月15日(金) 松江北高校生徒40名が見学。
- 12月22日(金) 東京藝術大学大学美術館からニホンアシカ剥製標本の返却。
- 12月27日(水) 第7回ミュージアム管理運営委員会開催。

平成19年

- 1月11日(木)～12日(金) 東京医科歯科大学大学院・若松秀俊教授が「島大ミュージアム学」の講師として来松。あわせて、学長表敬、奥谷町洋風官舎の視察等。
- 2月6日(火) 埋蔵文化財専門委員会開催。出雲キャンパスの病院再整備に係る埋蔵文化財調査計画について討議。
- 2月9日(金) 第8回ミュージアム管理運営委員会開催。
- 3月15日(木) 埋蔵文化財専門委員会(出雲キャンパス試掘調査現地検討会)。
- 3月15日(木) 鹿島町佐陀公民館の市民が見学。
- 3月26日(月) 普及啓発専門委員会開催。



ミュージアム発足式の様子(平成18年5月17日)

2 標本資料類等の収集・整理・保管・調査研究

(1) 標本資料類等の収集

学内他部局から下記資料の移管を受けた。

資料名	受入元	数量	備考
清水及衛執筆の筆書(額)	生物資源科学部附属生物資源教育研究センター	1点	昭和11年。
チョウザメ剥製標本	教育学部大谷研究室	1点	明治～昭和初期に美保関で捕獲。ガラスケース入り。ラベル(2-イ-1-604)
アオウミガメ剥製標本	同上	1点	頭と背腹両甲。捕獲地不明。
鳥類骨格標本	同上	1点	ラベル(2-イ-1-601・島根大学教育学部(理科))。
コウライキジ剥製標本	同上	1点	ラベル(島根県師範学校郷上研究室)(島根師範学校男子部)
カメ剥製標本	同上	1点	ラベル(2-イ-1-599)(島根師範学校男子部)
ハリネズミ剥製標本	同上	1点	ラベル(2-イ-1-600・島根大学教育学部)(島根師範学校男子部・昭和21.1購入)
オオミズナギトリ剥製標本	同上	1点	ラベル(オス・大波加島・昭和41.7.2)
南極の岩石・鉱物	教育学部林研究室	6箱	良好。H18.7.10。
旧版地図	同上	約2000枚	
イヌ頭骨標本	高安克己理事	1箱	良好。

イタチ骨格標本	同上	1箱	良好。
タヌキ骨格標本	同上	1箱	良好。
タイ頭骨標本	同上	1箱	良好。

この他、教育学部棟改修に伴って廃棄されていた顕微鏡、天秤計り等の実験器具のうち、将来的に歴史的・古典的価値が生じる見込みがあるものを収集した。

また、開学記念室に保管されてある本学や前身校に関する古写真のデジタル化作業を進めた。

(2) 標本資料類等の整理・保管

島根大学構内遺跡出土遺物や上記標本類等のミュージアム所蔵資料は、ミュージアム本館の建物内収蔵部屋において適切な環境のもとに整理・保管している。しかし、既に飽和状態であり、将来的に別の収蔵室確保が必要である。

(3) 標本資料類等の調査研究

島根大学構内遺跡出土遺物の研究

「Ⅲ－6 本学構内の埋蔵文化財の取扱い」で後述する。

島根大学及び前身校に関する資料調査

事務局が所蔵する本学や前身校の写真、行政文書等を収集し、特に、島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）や本学に在籍していた過去の著名な教官等について調査した。調査資料は、事務局に提供し、島根大学旧奥谷宿舎の国登録文化財の登録申請（平成18年12月登録）に協力した。

3 標本資料類等に関わる教育、普及啓発

(1) 展示活動

展示施設・内容

島根大学ミュージアムは、学内にある様々な展示施設・資料を「まるごとミュージアム」として位置付け、総称したものである。主な展示施設・内容は以下の通りである。

（松江キャンパス）

① 島根大学ミュージアム本館

島根大学ミュージアムのコア施設である。島根大学のキャンパス内は、大学ミュージアム（平成6～17年度は埋蔵文化財調査研究センター）によって、永年にわたり発掘調査がおこなわれており、主に、こうした島大キャンパス出土の考古資料を展示している。また、本館には、ミュージアム職員が常駐し、島根大学ミュージアムの総合案内、情報発信等を行っている。

■月～金・午前9時～午後5時開館。開館時間内は自由に見学できる。事前に予約すれば、祝休日でも開館。

② 正門門柱（国登録文化財）

1924（大正13）年3月建造。松江市忌部産の花崗岩（白御影石）製の正門柱2、脇門柱2からなる。旧制松江高等学校の正門として制作・使用された後、島根大学の正門として受け継がれた。2006（平成18）年12月、国登録文化財に登録された。

③ 「総合理工学部」研究紹介コーナー（総合理工学部3号館1階ロビー）

総合理工学部の教育研究内容や所蔵標本の一部が展示してある。

■月～金・午前8時30分～午後5時開館。開館時間内は自由に見学できる。

④ ミニ学術植物園「みのりの小道」（生物資源科学部棟周辺）

生物資源科学部によって運営されている、くつろぎながら学べる植物園。花壇などのほか、研究成果や豆知識などを説明したパネルを配置。整備作業には、学生や地域市民も参加している。

■年中無休。自由に見学できる。

⑤ 「古代出雲文化資料調査室」展示室（ミュージアム本館北隣）

法文学部考古学研究室が所蔵する考古資料の一部を展示している。1953（昭和28）年、文理学部の一室に設けられた標本室が、1978（昭和53）年、法文学部歴史学陳列室となり、2005（平成17）年3月、「古代出雲文化資料調査室」2階に移設された。膨大な量の収蔵資料は、故山本清名誉教授によって収集されたものや旧制松江高等学校に保管されていたものなどからなり、日本の考古学を研究するうえで大変、貴重なものが多く含まれている。

■普段は閉館しているが、見学希望者は、ミュージアム本館の職員に申し込めば開館する。

⑥ 山陰地域・汽水域資料展示室（汽水域研究センター1階内）

汽水域研究センターの前身である山陰地域研究総合センターが中心となり、昭和62年10月に「山陰地域研究総合センター資料展示室」が開設された。本展示室は、平成4年4月に汽水域研究センターが設置されたことに伴い、これを引き継いだものである。動物標本、化石・岩石標本、考古資料など、山陰地域・汽水域に関わる様々な分野の資料が総合的に展示してある。

■月～金・午前9時～午後4時開館。見学希望者は、ミュージアム本館の職員か汽水域研究センター事務室の職員に申し込めば対応。予約不要。

⑦ 「同窓会連合会」展示コーナー

島根大学や前身校である松江高等学校・島根師範学校・島根農科大学などの学校史に関わる写真・資料などが展示してある。

■月～金・午前10時～午後3時開館。開館時間内は自由に見学できる。

⑧ 附属図書館本館

附属図書館本館には、一般の蔵書のほか、膨大な量の古文書、絵図、貴重資料などが所蔵されている。正面入口を入って左側にミニ展示コーナーがあるほか、3階に小泉八雲関係の書籍・パネルを展示した「八雲文庫（8：30～17：00）」が設けてある。

■開館時間 月～金：午前9時～午後9時30分（授業のない期間は午後5時まで）

土・日・祝休日：午前10時～午後5時30分（授業のない期間は休館）

■休館日 授業のない期間の土・日・祝休日、定例図書整理日（偶数月第4水曜日）

年末年始（12月29日～1月4日）、特別整理期間（8月中旬及び3月下旬）

⑨ 「菅田ヶ丘古墳」移築展示

第2食堂の横には、移築復元された「菅田ヶ丘古墳」がある。もともとは、ここから西方約50mの丘の上にあった、長さ約30m・高さ約3.5mの古墳である。5世紀後半頃につくられたと考えられている。

■年中無休。自由に見学できる。

（出雲キャンパス）

① 附属図書館医学分館

附属図書館医学分館には、一般の蔵書のほか、古医書、明治以前の医療器具などがある。このうち、医療器具や解説パネルなどが、1階入口や2階閲覧室前廊下の展示コーナーで一般公開されている。

■開館時間 月～金：午前9時～午後8時、土・日・祝休日：午前10時～午後4時

■休館日 年末年始（12月28日～1月4日）その他分館長が認めた日

* 2階閲覧室前廊下では、華岡青洲の業績、大森不明堂三楽が学んだ華岡流医術、不明堂の医学塾生活、地元母里藩に帰国後の大森家の診療など、10枚のパネルで、大森文庫の内容を概観することができる。

* 2005年10月実施の大森文庫講演会について、館内でDVD視聴できる。

上記の他、平成18年11月4日（土）～12月17日（日）に開催された東京藝術大学大学美術館「The Wonder Box—ユニバーシティ・ミュージアム合同展—」にニホンアシカ剥製標本（汽水域研究センター所蔵）を出品した。

入館者数

学内の展示施設のうち、ミュージアム本館（ミュージアム管轄）と山陰地域・汽水域資料展示室（汽水域研究センター管轄）の入館者数は下表の通りである。

5月17日にミュージアム発足式を開催し、マスコミにも大きく取り上げられた結果、5月以降、入館者数が増加した。月ごとにばらつきが多いのは、学外団体客の人数に左右されたためである。学生等の入館者が少ないように見受けられるため、次年度以降は、さらに広報・周知をはかり、1ヶ月あたりコンスタントに100人以上の入館者数確保を目標にしたいと考える。

表 平成18年度の入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
ミュージアム本館	13	133	76	51	145	73	98	42	69	113	31	34	878
山陰地域・汽水域資料展示室	-	12	36	26	102	54	129	31	53	106	11	29	589
計	13	145	112	77	247	127	227	73	122	219	42	63	1467

(2) 講義（島大ミュージアム学）

ミュージアムが開講する授業として、後期から特別講義「島大ミュージアム学」を実施した。概要は以下の通りである。

授業科目名 「島大ミュージアム学～島根大学と島根県の自然・歴史・ひと・文化～」

授業の目的 島根大学で学ぶ学生は、県内外の出身地を問わず、島根県の自然・歴史・文化や本学の学校史、顕著な業績をあげた教官・卒業生等についての知識が希薄であるように見受けられる。そこで、本授業では、「ミュージアム」「フィールド」「モノ」をキーワードにして、島根県の自然・歴史・文化や島根大学の学校史・著名人等の基礎的事項について、学際的に学ぶものとする。あわせて、公開授業として地域市民にも聴講してもらう。

達成目標 島根県・島根大学について、広い基礎知識を得てもらうようにする。本授業を通して、学生や地域市民のなかに、島根県や本学に対する誇り・愛着が醸成されることを期待する。

科目 共通教養科目 選択

対象 1年次以上、市民

単位数 2単位

曜日時間 金曜日 2コマ目（10：15～11：45）

担当教員 高安 克己（島根大学ミュージアム館長・学術国際担当副学長）

会下 和宏（島根大学ミュージアム助手）

枚村 喜則（島根大学元助教授）

松尾 寿（島根大学名誉教授）

小泉 凡（島根女子短期大学助教授）

若松 秀俊（東京医科歯科大学大学院教授）

講義内容

日 程	講 義 内 容	講 師
10月13日(金)	1. 島大ミュージアム学ガイダンス	会下和宏
10月20日(金)	2. 島根大学構内遺跡について	会下和宏
10月27日(金)	3. 島根県の自然～植生を中心に～	枚村喜則
11月10日(金)	4. 出雲・松江の歴史と文化	小泉 凡
11月17日(金)	5. 発掘でわかった出雲地域の古環境	会下和宏
11月24日(金)	6. 島根大学周辺の史跡・遺跡・自然	会下和宏
12月 1日(金)	7. 松江城下町の歴史	松尾 寿
12月 8日(金)	8. 島根県の歴史・偉人	会下和宏
12月15日(金)	9. 島根大学史と島根県の近代高等教育	会下和宏
12月22日(金)	10. 島根大学の著名人 ～わが校の先人たちとその学問～	会下和宏
1月10日(水)	11. 大学博物館と島大ミュージアム	高安克己
1月12日(金)	12. カルシュ博士と旧制松江高等学校	若松秀俊
1月26日(金)	13. 島根大学所蔵コレクション概説 ～学内の展示施設見学～	高安克己・会下和宏
1月30日(火)	14. まとめ ～21世紀の島根県と島根大学～	会下和宏

受講者数は、学生133名、一般市民6名である。

受講者からは、「島根県には豊富な自然・歴史資源があること、島根大学が永い歴史をもつ伝統校であり多くの著名人を輩出していること、キャンパス内に古墳があること、学内に様々な標本資料が所蔵されていること、島根大学キャンパスが遺跡のうえに立地していること等を知り、驚いた、興味深かった…」等の感想がよせられた。

来年度の授業では、キャンパス内だけではなく、キャンパス周辺の古墳・城下町・里山等の見学も積極的に取り入れて、より充実した教育プログラムを開発していきたいと考えている。

4 博物館学教育

ミュージアム専任教員の会下和宏が、学芸員資格取得に必要な以下の授業を担当した。

- ・「博物館学特論Ⅰ・Ⅱ」(教育学部開講)
- ・「博物館学資料論」「博物館学情報論」「博物館学経営論」(法文学部開講)
- ・「考古学実習Ⅲ」(法文学部開講)

また、総合理工学部・生物資源科学部で開講している学芸員資格取得に必要な授業の非常勤講師控え室として、ミュージアム本館を提供し、あわせて授業準備等のサポートも行った。

上記の授業においても、ミュージアム展示室を活用した授業を展開した。

5 標本資料類等に関わる情報発信、地域貢献

(1) 刊行物の発行

当館及び本学の刊行物

下記の刊行物を制作し、学内や学外関係諸機関、学校、県内観光施設等に配布した。

- ・携帯用パンフレット『島根大学ミュージアム』…ミュージアム展示を紹介。(A4サイズ・3

つ折)

- ・パンフレット『学舎の履歴書～島根大学（松江キャンパス）と周辺の歴史～』…松江キャンパス内や周辺の遺跡等を紹介。
- ・図録『島根大学コレクション2007』
- ・ニュースレター『SHIMADAI MUSE』Vol.1（A4サイズ・4ページ）
- ・『島根大学ミュージアム年報～平成18年度～』
- ・『広報しまだい』Vol.3…ミュージアム紹介記事

当館及び本学所蔵資料が紹介・掲載された他組織の刊行物

- ・東京藝術大学大学美術館『The Wonder Box－ユニバーシティ・ミュージアム合同展－』2006年…「ニホンアシカ剥製標本（島根大学汽水域研究センター所蔵）」掲載。
- ・しまねミュージアム協議会監修『島根ミュージアムめぐり』ワン・ライン 2006年…島根大学ミュージアムの施設・資料の紹介。

(2) 新聞連載

山陰中央新報において島根大学コレクションを紹介する「学舎のお宝」を週1回連載した。連載内容は下記の通り。

	資料名	分野	所蔵部局・研究室等	執筆者	掲載日
	島大ミュージアム開設			高安克己（副学長）	18.5.11
1	西谷3号墓出土の葬祭用土器	考古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸（法文学部）	18.5.17
2	ニホンアシカの剥製	自然	汽水域研究センター	高安克己（副学長）	18.5.24
3	熊谷家旧蔵文書	文献	附属図書館本館	小林准士（法文学部）	18.5.31
4	堀尾期松江城下町絵図	その他	附属図書館本館	飯田啓子（附属図書館）	18.6.7
5	パレオパラドキシア骨格復元模型	自然	汽水域研究センター	瀬戸浩二（汽水域研究センター）	18.6.10
6	葉師山古墳出土の土器	考古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸（法文学部）	18.6.17
7	小泉八雲の自筆書簡	文献	附属図書館本館	加本純夫（附属図書館）	18.6.24
8	穴道湖・中海の植物プランクトン試料	自然	教育学部大谷研究室	大谷修司（教育学部）	18.7.1
9	隠岐馬の骨格標本	自然	汽水域研究センター	高安克己（副学長）	18.7.8
10	西谷3号墓出土の装身具	考古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸（法文学部）	18.7.15
11	大森文庫	文献	附属図書館医学分館	吉井紀子（附属図書館）	18.7.22
12	加納輝石	自然	総合理工学部地球資源環境学科岩石試料室	赤坂正秀（総合理工学部）	18.7.29
13	構内出土の櫛とヤス	考古	ミュージアム	会下和宏（ミュージアム）	18.8.5
14	シーボルト授与の修業証書	文献	附属図書館本館	飯田啓子（附属図書館）	18.8.12
15	出雲の地名ついた軟体動物化石	自然	総合理工学部地球資源環境学科	入月俊明（総合理工学部）	18.8.19
16	ハチに擬態した昆虫	自然	生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野	北村憲二（生物資源科学部）	18.8.26
17	日本海裂頭条虫	自然	医学部環境予防医学教室	米山敏美（医学部）	18.9.2
18	ミクロな世界の化石たち	自然	総合理工学部地球資源環境学科	入月俊明（総合理工学部）	18.9.9
19	さく葉標本	自然	生物資源科学部附属生物資源教育研究センター	寺田和雄（生物資源科学部）	18.9.16
20	構内出土の石器類	考古	ミュージアム	会下和宏（ミュージアム）	18.9.23
21	林家旧蔵文書	文献	附属図書館本館	相良英輔（教育学部）	18.9.30
22	ドロムン類	自然	生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野	北村憲二（生物資源科学部）	18.10.7

23	出雲国名所歌集二編	文 献	附属図書館本館	芦田耕一 (法文学部)	18.10.14
24	種子・果実標本	自 然	生物資源科学部附属生物資源教育研究センター	寺田和雄 (生物資源科学部)	18.10.21
25	南極の石・氷食礫	自 然	ミュージアム	林 正久 (教育学部)	18.10.28
26	雲陽秘事記	文 献	附属図書館本館	田中則雄 (法文学部)	18.11. 4
27	脚に鉄持ったカマバチ類	自 然	生物資源科学部生態環境科学科動物生態学分野	北村憲二 (生物資源科学部)	18.11.11
28	南極の石・蒸発岩と砂漠ワニス	自 然	ミュージアム	林 正久 (教育学部)	18.11.18
29	南極の石・風稜石	自 然	ミュージアム	林 正久 (教育学部)	18.11.25
30	構内出土の木材プレパラート標本	自 然	ミュージアム	会下和宏 (ミュージアム)	18.12. 2
31	教皇寺の瓦	考 古	法文学部考古学研究室	大橋泰夫 (法文学部)	18.12. 9
32	金崎1号墳出土の玉類	考 古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸 (法文学部)	18.12.16
33	サルガ鼻洞窟遺跡出土土器	考 古	法文学部考古学研究室	山田康弘 (法文学部)	18.12.23
34	出雲神社巡拝記	文 献	附属図書館本館	小林准士 (法文学部)	18.12.30
35	出雲国風土記小林鈔	文 献	附属図書館本館	芦田耕一 (法文学部)	19. 1.13
36	マダニ類	自 然	医学部環境予防医学教室	塩飽邦憲 (医学部)	19. 1.20
37	寺ノ峯経塚の四耳壺	考 古	法文学部考古学研究室	大橋泰夫 (法文学部)	19. 1.27
38	堀家文庫	文 献	附属図書館本館	田中則雄 (法文学部)	19. 2. 3
39	カンナ	その他	汽水域研究センター	山下晃功 (教育学部)	19. 2.10
40	チョウザメ	自 然	ミュージアム	会下和宏 (ミュージアム)	19. 2.17
41	隠岐国産物絵図註書帳	文 献	附属図書館本館	田籠 博 (法文学部)	19. 2.24
42	大智度論	文 献	附属図書館本館	浅田健太郎 (法文学部)	19. 3. 3
43	ウミガメ標本	自 然	ミュージアム	会下和宏 (ミュージアム)	19. 3.10
44	MAC菌	自 然	医学部微生物免疫学教室	宮岡治明 (医学部)	19. 3.17
45	鍵尾遺跡出土の土器	考 古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸 (法文学部)	19. 3.24
46	附属農場の桜	自 然	生物資源科学部附属生物資源教育研究センター	持田正悦 (生物資源科学部)	19. 3.31
47	コスモクロア	自 然	総合理工学部地球資源環境学科岩石試料室	高須 晃 (総合理工学部)	19. 4. 7
48	菅田ヶ丘古墳出土品	考 古	法文学部考古学研究室	渡辺貞幸 (法文学部)	19. 4.14
49	オホーツクアイト	自 然	総合理工学部地球資源環境学科岩石試料室	赤坂正秀 (総合理工学部)	19. 4.21
50	島根大学旧奥谷宿舎 (旧制松江高等学校外国人宿舎)	その他		会下和宏 (ミュージアム)	19. 4.28

(3) インターネット

島根大学ミュージアムのホームページ (<http://museum.shimane-u.ac.jp/>) を開設し、随時更新した。

コンテンツのうち、ミュージアム本館展示室「島根大学の履歴書」と題したページでは、構内遺跡の出土品等の写真を用いて、島根大学キャンパスにおける縄文時代から近現代までの歴史を分かりやすく解説した。

また、インターネット企画展示「写真でみる島根大学の歴史」と題したページでは、デジタル化した旧制松江高等学校、師範学校、県立農科大学等の島根大学前身校の校舎・学生等の写真を用いて、本学前身校の歴史を分かりやすく解説した。



トップページ



インターネット企画展示
「写真でみる島根大学の歴史」

このほか、しまねミュージアム協議会制作の「しまねバーチャルミュージアム (<http://www.v-museum.pref.shimane.jp/>)」のなかでも当館の紹介ページが掲載されている。

(4) 地域貢献活動

a 展示案内, キャンパスツアー

・展示案内

ミュージアム本館に来館した見学者に分かりやすく展示解説したり、別の場所にある展示施設に誘導・案内したりした。

・キャンパスツアーの実施

地域市民、学校、学内教職員等から予約をうけて、下記の①～⑧基本コースを中心に、学内の展示施設等を解説しながら案内した。主な実施状況は「Ⅲ-1 主な活動の日記抄」に記してある。

- ①旧制松江高校～島根大学正門の門柱（国登録文化財）
- ②総合理工学部3号館1F研究紹介コーナー・3号館高層階からキャンパスや市街地を展望
- ③ミュージアム本館
- ④古代出雲文化資料調査室
- ⑤みのりの小道（ミニ学術植物園）
- ⑥汽水域研究センター「山陰地域・汽水域資料展示室」
- ⑦菅田ヶ丘古墳（移築復元）
- ⑧附属図書館、同窓会連合会展示コーナー

・「夏休み・しまだい探検」の実施

日時 平成18年8月25日・26日

内容 展示施設・附属図書館等を親子で見学するキャンパスツアー。標本にさわったり、クイズに答えたりして、楽しく大学の空気にふれてもらった。附属図書館では、通常見学できない貴重資料を展示した。平成18年度文部科学省「子ども霞が関見学デー」と同時期に開催される取組の一環として開催。参加者は、8月25日が12名、26日が10名。

b 公開講座

・公開講座「島根まるごとミュージアム体験ツアー」

日時 平成18年11月3日（祝・金）、11月11日（土） 2回

共催 県立三瓶自然館

内容

第1回：「三瓶山の自然・文化・遺跡」についての講義と島根大学ミュージアムでの関連資料の見学。

第2回：松江をバスで出発し、県立三瓶自然館・三瓶小豆原埋没林公園を日帰りで見学。ミュージアム教員が車中で、ルート上の遺跡・自然について講義し、県立三瓶自然館・三瓶小豆原埋没林公園では、中村唯史主任学芸員等が展示解説を行った。

受講登録者数は19名。県立三瓶自然館の学芸員から分かりやすい展示解説を聞くことができ、受講者から大変好評を得た。



夏休み・しまだい探検（平成18年8月25日）



公開講座「島根まるごとミュージアム体験ツアー」
（平成18年11月11日・於県立三瓶自然館）

6 本学構内の埋蔵文化財の取扱い

(1) 島根大学構内遺跡第15次調査（竹崎地区1）

遺跡名 島根大学構内遺跡（竹崎地区）

所在地 島根県松江市西川津町1060 島根大学松江キャンパス（旧字名：竹崎，図6）

調査名 島根大学構内遺跡第15次調査（竹崎地区1）

調査略号 06S-15

調査主体 島根大学ミュージアム

調査原因 教育学部棟改修工事

調査面積 約126㎡

調査期間 平成18年10月11日～10月27日

調査経過 10月11日 北東区近現代盛土重機掘削。

10月12～13日 北東区第1・3・4層の掘り下げ。掃除、写真撮影。南壁断面図作成。

10月16日 北西区近現代盛土重機掘削。

10月16～17日 北西区第1・3・4層掘り下げ。掃除、写真撮影。南壁断面図作成。

10月19日 現地検討会開催。校舎北西側土壌サンプル採取。

10月18～25日 南西区、第1・3・4層掘り下げ。4層下位で基盤層上面を確認。写真撮影、図面作成等。

10月23～26日 南東区、近代盛土重機掘削。第1・3・4層掘り下げ。写真撮影、図面作成等。ピートサンプリング。

10月27日 補足作業。機材撤収。

層位・遺物 縄文期の遺物を含む古穴道湾ないし古穴道湖の海成層（第4層）、その上位に砂州層（第3層）を検出している（次ページ表）。

層位	層相	標高(m)	遺物	堆積時期
第1層	しまった灰色粘土	+1.0～(+1.2～1.3)	陶磁器・棧瓦・土錘等	近代
第3層	灰オリーブ色細砂 (砂州層)	(+0.7～0.8)～+1.0	礫	縄文時代
第4層	オリーブ黒色シルト (海成層)	(-1.96～+0.2)～ (+0.7～0.8)	縄文土器、材、礫	縄文時代
第5層	基盤層	-1.96～+0.2		

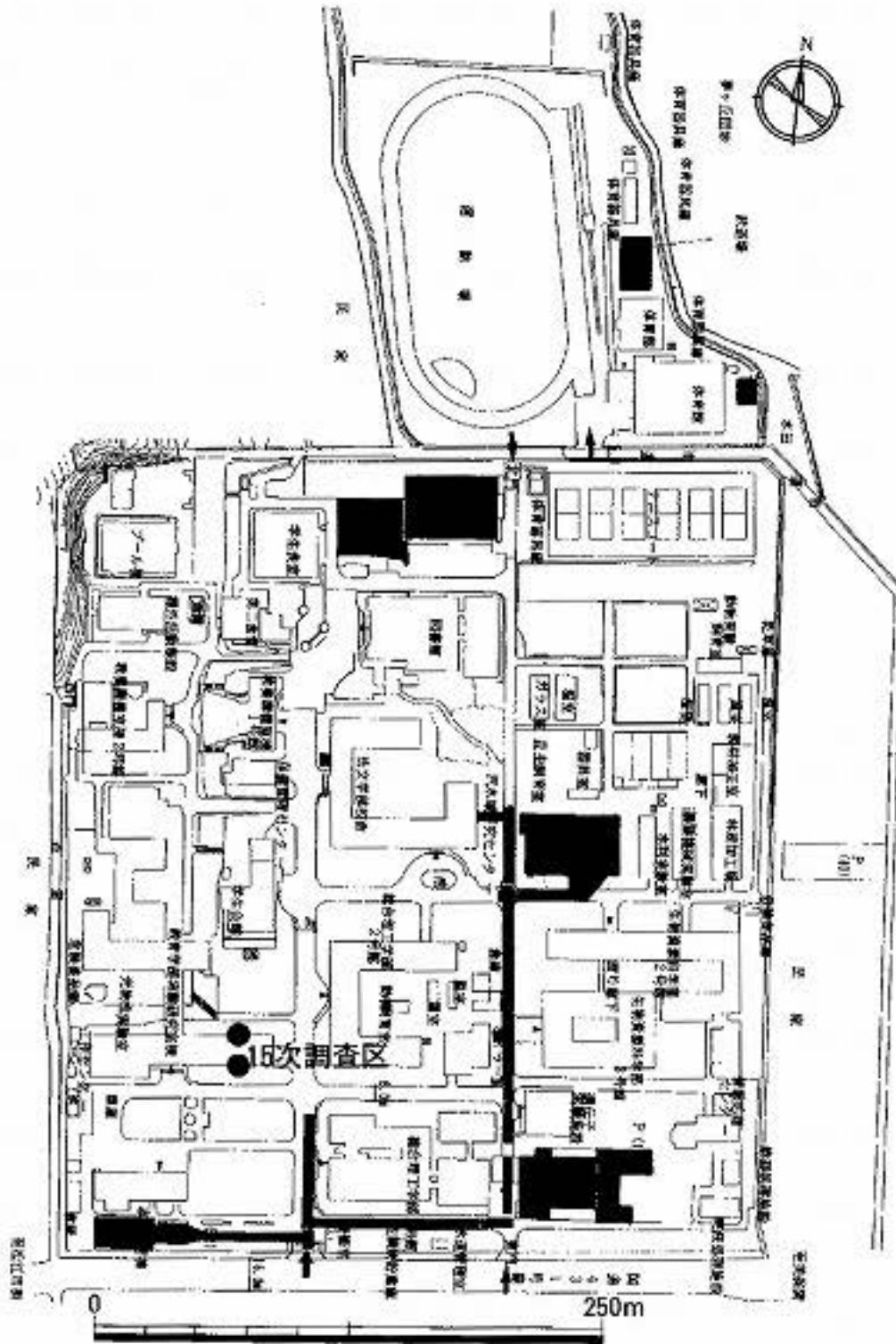


図6 島根大学構内遺跡第15次調査位置図(1/5,000)

特記事項

- ・調査区が狭小なため、遺物の出土は少ないが、縄文期の砂州・海成層等を検出し、構内西部の古環境を知る手がかりを得ることができた。
- ・基盤層上面が、トレンチ西(標高+0.2m)から東(標高-1.96m)へ傾斜して落ち込む状況を確認し、縄文海成層堆積前の地形を知るデータを得ることができた。
- ・アカホヤ火山灰を確認できなかったが、今後、採取したコアを精査する予定である。

(2) 島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査

遺跡名 島根大学出雲キャンパス構内遺跡
所在地 島根県出雲市塩冶町89-1 A・Bトレンチ2箇所(図7)
調査主体 島根大学ミュージアム
調査面積 約25㎡×2ヶ所
調査期間 平成19年3月12日～3月15日
調査目的 新病棟建設地(平成20年度から施工予定)における埋蔵文化財の有無、遺構・遺物包含層の量等を確認するため。

調査経過

3月12日 Aトレンチ掘り下げ・写真撮影。

3月13日 Aトレンチ断面図作製，Bトレンチ掘り下げ・写真撮影・断面図作製。

3月14日 断面図作製，排土内遺物確認など。

3月15日 ミュージアム埋蔵文化財専門委員会を現地に於て開催。A・Bトレンチ掘り下げ。

層位（図8）・遺物

第1層は，島根医科大学の敷地造成前に使用されていた水田の耕作上で，その下位の第2層は，神戸川によって運搬された細砂・シルトの堆積層である。

・Aトレンチ基本層序

層位	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
第1層 (水田耕作土)	黒褐色粘土 暗オリーブ褐色粘土 オリーブ黒色粘土	+6.4~6.8	土師器，瓦，須恵器	近世?~近代
第2 a層	灰オリーブ色シルト（植物 生痕あり） オリーブ黒色シルト	+6.2~6.4	土師器（底部糸切り痕）， 陶器	中世?
第2 b層	オリーブ黒色細砂	+5.9~6.2	なし	不明
第2 c層	オリーブ黒色シルト	+5.4~5.9	なし	不明
第2 d層	オリーブ黒色細砂	~+5.4	なし	不明

・Bトレンチ基本層序

層位遺構	層相	標高 (m)	遺物	堆積時期
第1層 (水田耕作土)	黒褐色粘土 暗オリーブ褐色粘土	+6.52~6.8	陶磁器	近世?~近代
第2 a層	灰オリーブ色細砂	+6.5~6.52	なし	不明
第2 b層	オリーブ黒色シルト	+6.3~6.5	なし	不明
第2 c層	灰オリーブ色細砂	+6.2~6.3	なし	不明
第2 d層	暗灰黄色シルト（植物生痕 あり）	+6.0~6.2	なし	不明
第2 e層	オリーブ黒色細砂	+5.8~6.0	なし	不明
第2 f層	オリーブ黒色シルト	~+5.8	なし	不明

* 層名は，トレンチごとに命名したもの。

特記事項

- ・中世頃の遺物包含層を確認した。出雲キャンパス周辺では，築山遺跡などで，中世の遺構が検出されており，キャンパス付近にも中世集落が存在する可能性がある。
- ・中世以前とみられる河川堆積物（第2層）を確認し，出雲キャンパスが立地する平野の形成過程を知る資料が得られた。

(3) 島根大学構内遺跡第14・15次調査，島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査の整理・研究

上記調査のほか，平成17年度に実施した島根大学構内遺跡第14次調査（ボーダフォン株式会社携帯電話アンテナ設置工事に伴う発掘調査），上記の同遺跡第15次調査等の出土遺物の洗浄・実測・トレース，遺構図面トレースといった室内整理作業を進めた。

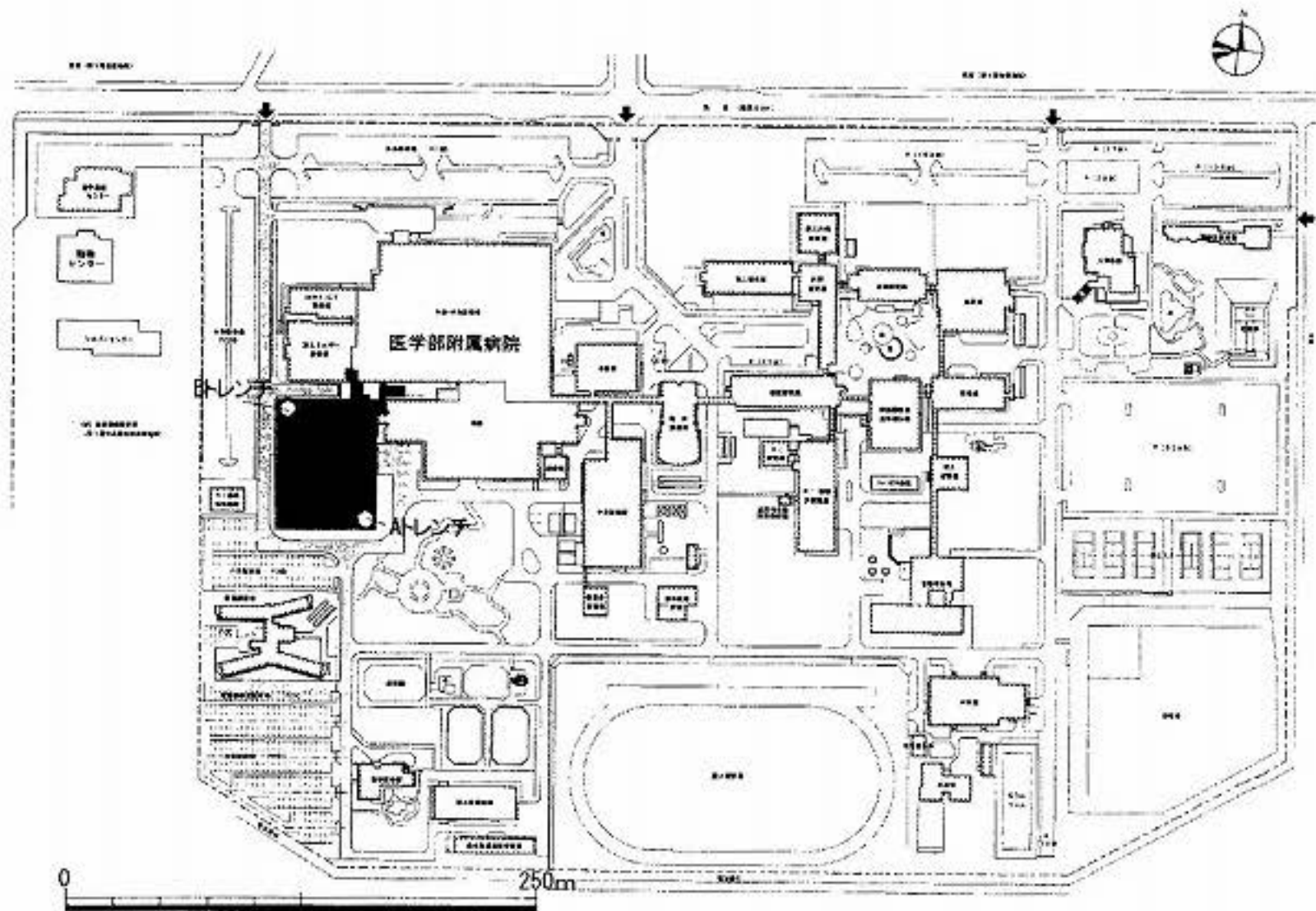


図7 島根大学出雲キャンパス構内遺跡試掘調査位置図 (1/5,000)

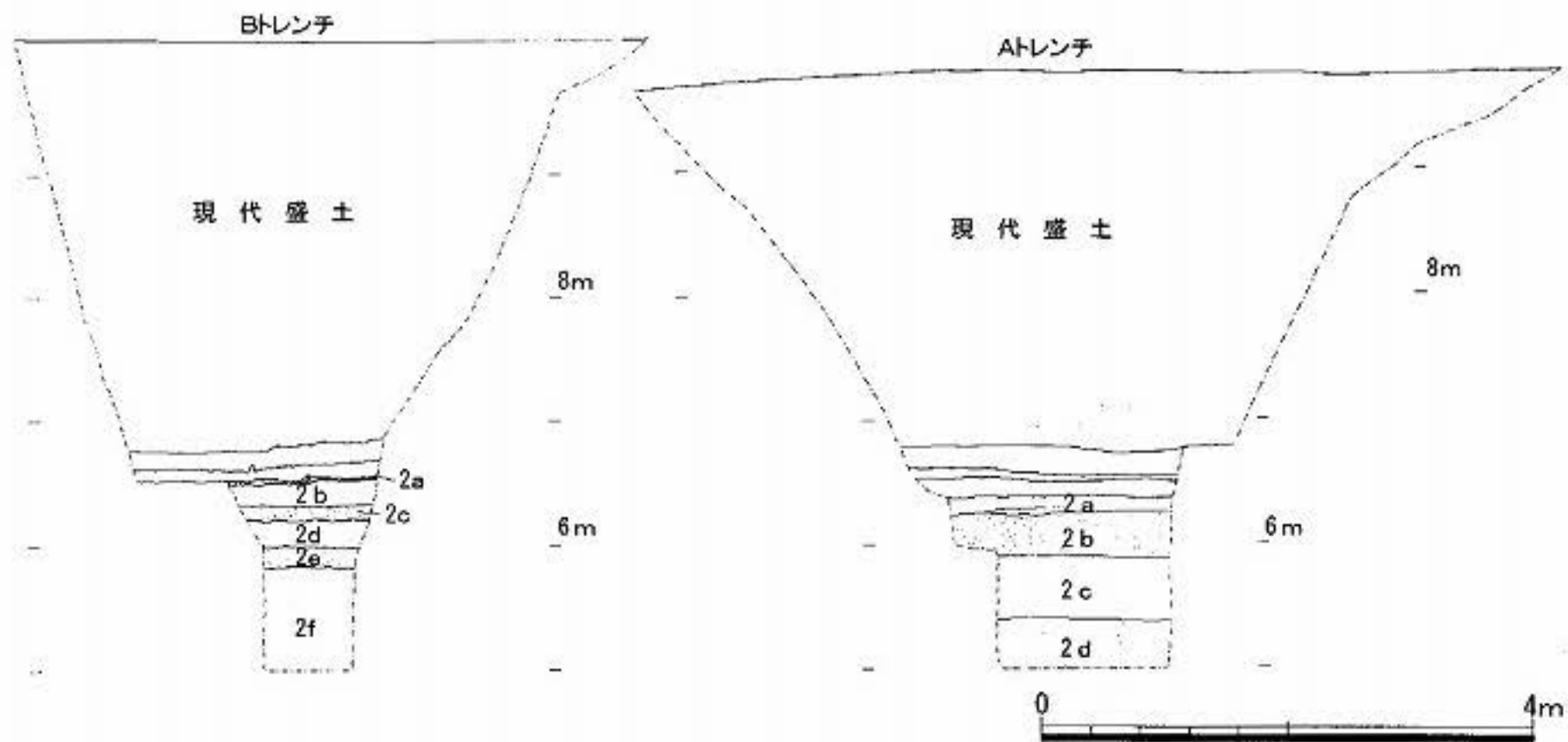


図8 島根大学出雲キャンパス構内遺跡北壁断面図 (1/80)

7 その他

(1) 島根大学旧奥谷宿舎保存活用検討ワーキンググループの設置と活動

旧制松江高等学校時代の数少ない建造物である島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）が老朽化のため、一時、解体される案が検討されたものの、歴史的・建築学的価値から鑑みて、保存されることが、本学の方針として決定された。

これをうけて、宿舎の保存活用策をミュージアムが担当することになり、ミュージアム普及啓発専門委員会の下にワーキンググループを設置した。

ワーキンググループの構成員は、高安克己（館長）、渡邊貞幸（副館長）、会下和宏（ミュージアム専任教員）、竹永三男（法文学部）、小林准士（法文学部）、飯野公央（法文学部）、相良英輔（教育学部）の7名である。

現在、ワーキンググループでは、建物の歴史的価値、建築学的価値、周辺地域の歴史的環境等を調査し、地域市民グループや行政等とも連絡調整をとりながら、保存活用案の策定を進めている。

(2) しまねミュージアム協議会・国立大学博物館等協議会への参加

島根大学ミュージアムの発足に伴い、しまねミュージアム協議会と国立大学博物館等協議会に参加した。

しまねミュージアム協議会は、島根県内にある展示施設が連携・協力し、活動を担う人材育成とそれぞれの展示施設の特色ある発展や地域の振興を目指すものである。平成18年6月15日の平成18年度総会（於・荒神谷博物館）において島根大学ミュージアムの加盟が承認された。

国立大学博物館等協議会は、会員相互で緊密に連絡・協力をとりあって、国立大学における学術標本の収集・保存・活用の向上を図り、教育・研究の進展に寄与することを目的としたものである。島根大学は、それまで汽水域研究センター山陰地域資料室として所属していたが、平成18年6月23日の第9回総会（於・北海道大学）において島根大学ミュージアムへ変更することが承認された。また、会場では、島根大学ミュージアムを紹介するポスターを掲示し、PRした。

8 ミュージアム教員の活動記録

(1) 会下和宏 EGE Kazuhiro 助手

論文ほか

- ・会下和宏「東南アジアの遺跡・博物館を訪れて～ラオス・ベトナムを中心に～」『博古研究』第31号 2006.4
- ・会下和宏「弥生時代の未成人埋葬について」『日中交流の考古学』同成社 2007.3
- ・会下和宏「『島根県遺跡データベース』の構築と運用」『情報考古学』12-2 2007.3

研究発表等

- ・会下和宏・高安克己「『島根大学ミュージアム』の発足－地方大学における附属ミュージアムの開設事例－」第1回博物科学会 2006.6.23（於・北海道大学）
- ・会下和宏「弥生墳墓の副葬品研究の課題」四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究第5回客員共同検討会 2006.9.12（於・島根県古代文化センター）
- ・会下和宏「漢代併行期・北東アジアにおける金属製武器の比較研究」2006年度博古研究会総会 2006.10.14（於・茨城大学）

社会的活動

- ・会下和宏「東アジアから見た荒神谷遺跡」放送大学島根学習センター開設10周年記念公開講演会 2007.1.20（於・島根県斐川町荒神谷博物館）

担当授業

次の授業を担当した。

- ・「博物館学特論Ⅰ・Ⅱ」（島根大学教育学部）
- ・「博物館学資料論」「博物館学情報論」「博物館学経営論」（島根大学法文学部）
- ・「考古学実習Ⅲ」（島根大学法文学部）
- ・「日本の自然A」（島根大学、外国人留学生向け講義）（分担）
- ・「島大ミュージアム学」（島根大学、特別講義、公開授業）（分担）

Ⅳ 島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）について

会下 和宏

1 はじめに

島根大学の前身校の一つである松江高等学校は、わが国で17番目に設置された旧制高等学校である。

旧制松江高等学校には、文科と理科があり、第1外国語によって、甲類（英語）・乙類（ドイツ語）に分かれていたが、語学教育のために各1名、外国人教師を雇用していた。この備外国人教師が居住するための宿舎1棟が、現在も松江市奥谷町の閑静な住宅地のなかに残されている。戦後、島根大学に引き継がれてからは、宿泊施設や独身宿舎として利用されていたが、現在は使用されていない。

建物は、築80年以上が経過し、老朽化のため、一時取り壊す案が浮上したものの、平成18年度、島根大学では、この宿舎を保存し、将来的に活用していく方針を英断した。

小稿では、今後の保存活用方針を探るうえでも、この建物をめぐる建築学的・歴史的意義について若干であるが、ふれておくものとする。

2 建築について

(1) 島根大学旧奥谷宿舎の特徴

宿舎は、「島根大学旧奥谷宿舎（旧制松江高等学校外国人宿舎）」と呼称されている（以下、外国人宿舎とする）。

1924（大正13）年11月29日落成で、現在の建物面積は137㎡である。

松江市内でも希少な、急勾配の三角屋根をもつ木造2階建て洋風建築である。基礎の上には地元の「来待石」が用いられ、正面2階の張り出し部分を玄関ポーチの柱で支える。外壁は、1階が木製の横板張り、2階がセメントモルタル投げ付け塗り仕上げ、2連及び3連の連続窓を四周に付ける。内部は多くが改装されているが、1階北東隅部屋は、漆喰の下に木摺りを張った壁が観察でき、天井には漆喰の芯飾りがみられる等、築造当初の状況を留めている。

当初、同一企画の1号官舎（独語講師居住用）と2号官舎（英語講師居住用）の2棟が並んで建っていたが、2号官舎は、1937（昭和12）年3月28日、火事で全焼した。

(2) 大正時代の住宅建築

大正期は、都市中間層が出現し、明治期以降の上流階級が導入した西洋流の生活様式への憧憬から、欧米風中流住宅が広まっていった時代である。

1920（大正9）年、政府の外郭団体である「生活改善同盟会」が発足、そのなかに住宅改良の調査研究をおこなう「住宅改善調査委員会」が設置され⁽¹⁾、椅子座の導入、家族本位の間取り等の住宅改善を提案した。

また、この頃、「あめりか屋」創立者である橋口信助等による「生活改良会」の活動があり⁽²⁾、急勾配の三角屋根、1階が下見板、2階がスタッコ粗面仕上げという同社の西洋風住宅は、東京・大阪等の都市郊外や軽井沢等の避暑地で急激に普及した。1922（大正11）年には、東京上野での「平和記念東京博覧会」、大阪箕面・桜ヶ丘での「住宅改造博覧会」が開かれ、「生活改善同盟会」ないし「あめりか屋」等が急勾配の三角屋根建築を始めとする中流住宅モデルハウスを展示する等、日本の住宅改良をリードしていた。

既に森口保氏が指摘しているように、旧制松江高等学校の外国人宿舎も、大正時代に流行した上記の洋風建築の系譜のなかに位置付けられる（森口2006）。なお、この外国人宿舎と近い時期に建設された旧制弘前高等学校や旧制佐賀高等学校の外国人宿舎も下見板張で三角屋根をもつ2

階建て洋風建築であり、同様に当時の流行を反映していることが窺える。

(3) 外国人宿舎建築の経緯

島根大学には、松江高等学校会計課『大正12年度起 官舎関係書類綴』、『大正13年度起 官舎関係書類綴』と書かれた外国人宿舎に関する文書綴りが保存されている。ここには、外国人宿舎に関する松江高等学校と文部省との行政文書のやり取り、工事の仕様書、請求書等が綴られている。

以下、その一部を引用して、現存する2階建て外国人宿舎が建築された経緯についてふれておこう。

(手紙1)

拜啓 小生松江高等学校英語教師として任命を受け去る五月、日本に到着任り候。小生の到着に先立って前校長小松倍一氏は次の様な事を来翰有之候。政府は小生の為めに家を建てんと致し居り候。然しその間は日本住家に住み下さるまじく候や、尚之新住宅は8月の終に整ふ可く候と申され候。小生も学校当局の様な假の繰合せには承諾する様申し候。従って私の妻と以前学生の下宿屋として仕様されてゐた家に行き暮し居り候。

設計は初まり、敷地は決定し又契約は建築者と署名され候へ共も今日に至る迄遙か何も為されず候。この事は急を要し候。と申すは小生の妻は秋に赤ん坊を予期せられ候。それで、その出産以前に新住宅に移るといふ前校長の約束に信頼致し居り候。現在の家は非常に貧弱に建て有之為め寒気に堪へ難く候。その為妻及び赤子はその中に休んで居る事に忍びずと存じ候。それ故小生は非常に困難なる立場に有之候。若し貴下にしてこのセン延せる建築を促さしめ下さらば幸甚の至りに存じ候。日本語を話せぬ私はどんな事が起つてゐるか見出す事は非常に困難に御座候。誰も何か知つてゐる様に存ぜられず候。この事に関して貴下の御助力に信頼する事が出来ると信じます。

敬具

一九二四年七月二十一日

島根県松江市

殿

(文書1)

江高専一

大正13年8月1日

文部省専門学務局長 粟屋謙

松江高等学校長 乗杉嘉壽殿

外国人教師官舎ニ関スル件

貴校英語教師 C, Bogd Bowman氏ヨリ別封ノ通申出有之タル処右ニ依レハ本人ハ非常ニ困難ヲ感シ居ル次第ナルヲ以テ建築ニ関シ至急何分ノ御配慮相成度尚事実未着手ナルニ於テハ如何ナル事情ノ存スルモノナルヤ又予定ノ通建築完成セサル場合本人ニ対シ如何ナル方法ヲ講セサルルヤ

其ノ御見込等一応承知致度ニ付御回報相成度
追テ別封ハ御回報ノ際御返付相成度

(文書2)

雲会第55号

大正13年8月5日起案

案

当校備外国人教師官舎二棟(外ニ日本人官舎四棟)建設ニ関シ敷地賃借ノ上進行スヘキ旨貴省会計課長ヨリノ通牒ニ接シタルハ客年十二月上旬ニシテ爾來敷地借入ノ為メ適當ナル場所之シキト地代関係等ノ為非常ナル困難ヲ重ネ漸ク本年三月十四日付ヲ以テ右賃借契約締結ノ認可申請ヲ為シ直チニ外国人教師官舎ノ設計ニ着手セリ而シテ本省ノ指定ハ木造平屋建ナルガ故ニ此指定通り設計図及仕様書作製方進行セシメ且ツ昨年来備入中ノ独逸語教師ハ其平屋建ナルコトヲ是認スルコトナレリ其後英語教師トシテ新タニ備入ニ係ルシー・ポイド・パウマン氏英国倫敦ヨリ急ニ來航セラルルノ報ニ接スルヤ四圍ノ事情ハ平屋建ノ設計ヲ二階建ニ変更スルヲ以テ同氏ノ希望ニ添フモノト為スニ至リ遂ニ貴省会計課ノ承諾ヲ得テ之レガ変更ヲ為スコトニ決定セラレ其結果四十餘日ヲ費シ殆ント完成ノ期ニ達セシ設計図及仕様書ハ悉ク之レヲ廢棄スルハ止ムナク更ラニ新タニ設計ヲ進メ其完成ヲ待テ直ニ指名競争入札ニ付シ七月二日開札ノ結果再入札共予定価格ヲ超過シ而モ予定価格ノ範囲内ニテ随意契約ニ応シ得ベキ者ナキ形勢ヲ示シタル為一旦契約不調ノ状態ト為リシ処其後最低価格ノ入札者ハ建築材料並各種職工人夫ノ賃銀等ニ関シ諸方面ニ亘リテ取調ヲ遂ケタル結果契約締結致シ度旨ノ申出アリタルニ付七月十七日ヲ以テ随意契約ヲ締結シ同月二十五日起工ニ着手シ目下工事進行中ニ有之候竣工期限ハ本年十月二十五日ニシテ当校ハ備外国人教師官舎ノ建築ナルト其他ノ建築ナルトヲ問ワス入札ニ付スル以前ニ於テ之レガ竣工期日ヲ予定シタルコト無之隨而前任小松校長トパウマン氏トノ間ニ如何ナル時期ニ於テ如何ナル信書ノ交換アリシカハ目下不明ナルガ故ニ去ル一日付江高專一號御照會書ノ後段ニ属スル『又予定ノ通建築完成セサル場合本人ニ対シ如何ナル方法ヲ講セラルルヤ其見込』等ニ関シテハ今茲ニ即答シ難モ出来得ル限り尽力致ス考ニ有之候

右不取敢御送付ノパウマン氏提出ノ別封相添ヘ此段及回答候也

年 月 日
校長名

文部省専門学務局長宛

(手紙1)は、松江高等学校に赴任したパウマン英語講師が外国人宿舎早期建築を文部省に直談判する内容の手紙である。(文書1)は、この手紙をうけて、文部省専門学務局から松江高等学校に外国人宿舎の進捗状況を問いただす内容であり、(文書2)は、これに対する松江高等学校から文部省への回答文書である。

以上の文書やこの他の文書等から外国人宿舎建築までの紆余曲折の経緯や関連事項を年表に整理すると以下のようなになる。

1923(大正12)年12月上旬 文部省会計課から松江高等学校へ外国人教師官舎建設の通達

1924(大正13)年3月14日 建設地の賃借契約締結。

ただちに設計に着手。文部省指定の平屋建てで設計図・仕様書作製。パウマン英語講師が二階建て宿舎を希望。

1924(大正13)年4月24日 文部省に二階建てへの設計変更を打診したところ、許可がおりる。

1924(大正13)年6月 二階建てに設計変更した宿舎の仕様書ができる。

1924(大正13)年6月 松江高等学校の校長が初代・小松倍一から第2代・乗杉嘉壽になる。

1924(大正13)年7月2日 入札。不成立。

1924(大正13)年7月17日 松江市灘町の業者と随意契約締結。

1924(大正13)年7月25日(竣工調書では7月20日) 建設に着工する。

1924（大正13）年10月16日 竣工期日10月25日を11月30日に延期する。

1924（大正13）年11月29日 竣工。

（文書2）によれば、外国人宿舎は平屋建てで施工する予定だったところ、バウマンの強い要望によって2階建てに設計変更せざるを得なくなったとあり、当時の外国人教師の発言力の強さが窺える。1924（大正13）年7月21日の（手紙1）において、バウマンが、外国人宿舎工事の遅延について心配しているが、（文章2）の内容が正しいとすれば、着工が遅れる原因となったのは、そもそもは、バウマンによる設計変更の要望に端を発しているといえる。

3 居住者について

宿舎の居住者は、下表の通りである。ここでは、このうちドイツ語講師のプラーゲとカルシュについてふれておきたい。

表 外国人宿舎居住者一覧

氏名	赴任期間	宿舎居住期間	国籍		備考
1号官舎居住者					
ハインリッヒ・マックス・ウィルヘルム・プラーゲ	T11.3～T14.6	T14.3～?	ドイツ	独語講師	著作権の父。
フリッツ・カルシュ	T14.10～ S6.3.31 S6～S14.3	T14.10.1～ S6.3.31 S6.11.27～ S14.3.31	ドイツ	独語講師	哲学者。
ゲルハルト・ハーマッヘル	S6.4～S6.7		ベルギー	独語講師	母衣町教会の神父。ワシントン大学で神学・英語学を専攻。臨時講師
ハンス・シュワルベ	S14.11～S20.8	S14.11.1～ S20.8.6	ドイツ	独語講師	退任後、駐日ドイツ大使館報道官。
藤野義夫	T15.4.9～ S28.4.2	S20.9.13 (9.6)～ S23.3.31	日本	独語教授	岡村と同居。 ヘルマン・ヘッセと文通。
岡村弘	S16.8～ S27.8.1	S20.9.13 (9.6)～?	日本	独語教授	藤野・原と同居。
原弘二郎	S5.4.1～ S28.7.31	S23.4.1～?	日本	西洋近代史教授	岡村と同居。
2号官舎居住者					
シーボイド・バウマン	T13.5～T15.3	T14.3.18	イギリス	英語講師	23歳で赴任。
アーノルド・ディクインシ・ミアーズ	T15.4～S4.3	T15.4.5～ S4.3.31	イギリス	英語講師	S41.2.16死去
エイチ・トゥルーマン・ギルソン	S4.4～S4.7	?	イギリス	英語講師	S4、カナダから来日
エス・ベッセル	S4.9～S5.1	?	イギリス	英語講師	満鉄を経て来日

エドワード・ウィティカー	S 5.1～S 7.3	S 5.1.25 (S 4.12.19) ～?	イギリス	英語講師	ケンブリッジ大学卒業後、来日。数学者。
ハロルド・ジョンソン・ウッドマン	S 7.4～S17.3	S 7.4.1～ S12.3.28	アメリカ	英語講師	日本生まれ。ボストン大学、ニューヨーク大学で学び東北学院や富山高校で教鞭とる。日本人と結婚。娘2人。

(1) ウィルヘルム・ブラーゲ博士 1888～1969

ブラーゲ博士については、大家1999・2003に詳しい。わが国における著作権概念普及のきっかけをつくった人物である。

ベルリン大学で法律と日本語を学び、ドイツ帝国外務省に入省、在日本ドイツ大使館に勤務。1922～1925（大正11～14）年、旧制松江高等学校のドイツ語教師として勤務する。

ハンブルグ大学で博士号をとり、昭和3年、旧制松山高等学校、1929（昭和4）年4月～1931（昭和6）年3月末、旧制第一高等学校、1930（昭和5）年3月末～1933（昭和8）年12月、旧制府立高等学校でドイツ語を教える。

1931（昭和6）年8月、東京に事務所をおき、ヨーロッパの著作権者の代理人として、著作権使用量の取立業を始め、「ブラーゲ旋風」という一連の騒動を起す。この騒動で、NHKは1933（昭和8）年8月から一年間近く欧米の曲が放送できなくなったといい、これをきっかけとして、JASRACの前身である大日本音楽著作権協会が結成される等、わが国における著作権法の遵守が進んだ。

なお、松江高等学校第2代校長・乗杉嘉壽は、1928（昭和3）年4月、東京音楽学校長として転出し、1935（昭和10）年、日比谷公会堂での東京音楽学校定期演奏会において演奏権使用料を支払わなかったことからブラーゲに刑事告訴されている。

(2) フリッツ・カルシュ博士 1893～1971

カルシュ博士については、若松2002・2007に詳しい。ブラゼビッツ生まれ。18歳の時、ドレスデン国際博覧会で日本と出会い、ラフカディオ・ハーン存在を知る。

日本の宗教や哲学、文化にも高い関心を持ち、人の認識の発展過程を考究する「人智学」を提唱したシュタイナーを日本に紹介する等、日本の哲学史のうえでも重要な人物である。

1925年から14年間、旧制松江高等学校でドイツ語を教える。赤澤正道、高田富之等の政治家、レーダー開発に従事した酒井勝郎、「長崎の鐘」の著者である医師・永井隆等の青年期に多大な影響を与える。

第二次大戦中は東京のドイツ大使館に勤め、終戦間際は軽井沢に疎開。1971年、ドイツ・カッセルで死去。

4 おわりに

以上、外国人宿舎にかかわる建築学的位置付けと居住者について概略をふれた。

旧制松江高等学校の校舎や自習寮建物がすべて取り壊され現存しないなか、この外国人宿舎は、当校にかかわるほとんど唯一の建築物であり、松江市内では数少ない近代洋風建築でもある。こうしたことから、この外国人宿舎が、地方における近代建築の受容過程、高等教育史、国際交流史を知るうえで希少な歴史的建築物であるといえる。また、上記のように、居住者には、日本近代史に名前を残す著名人もいた。

今後、外国人宿舎にまつわる史料や周辺地域の歴史も含めた調査をさらに進め、松江や日本のなかでの歴史的な位置付けをより明確にしていきたいと考える。

註

- (1) 生活改善同盟会…大正8年11月～大正9年2月、文部省が「生活改善展示会」を開催、それを契機に大正9年1月、文部省普通学務局第四課初代課長・乗杉嘉壽（大正13年6月から旧制松江高等学校第2代校長）と東京博物館館長・棚橋源太郎が中心になり財団法人「生活改善同盟会」が発足した。設立目的は、社会民衆を教育し国民生活の向上に帰することにあつた。

なお、旧制松江高等学外国人宿舎の設計に乗杉嘉壽校長が関与していた可能性を考えたが、彼が松江に赴任する頃には、宿舎の仕様書が既に完成していたようである。

- (2) 住宅改良会…大正5年8月、「あめりか屋」創立者・橋口信助と常盤松女学校長・三角錫子が、住宅改良・実践を啓蒙する機関として設立。顧問には、佐野利器（東京帝国大学教授）、武田五一（京都高等工芸大学教授）等がいた。雑誌『住宅』を発刊し、洋風住宅や椅子座式生活様式の普及啓発に努めた。

参考文献

内田青蔵 1987『あめりか屋商品住宅～「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局

内田青蔵 1992『日本の近代住宅』鹿島出版会

大家重夫 1999『改訂版 ニッポン著作権物語ーブラーゲ博士の摘発録』青山社

大家重夫 2003『著作権を確立した人々』成文堂

松江高等学校『旧職員履歴書綴（助教授・講師・事務職員）』（島根大学所蔵）

松江高等学校会計課『大正12年度起 官舎関係書類綴』（島根大学所蔵）

松江高等学校会計課『大正13年度起 官舎関係書類綴』（島根大学所蔵）

松田武雄 2004『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会

森口 保 「旧制松江高校の遺産」『山陰中央新報』2006年9月14日朝刊

若松秀俊 2002『湖畔の夕映え』文芸社

若松秀俊編 2007『忘れ得ぬ偉人 カルシュ博士と旧制松江高校』ホンニナル出版

島根大学ミュージアム年報

平成18年度

発行 2007年3月29日

発行者 島根大学ミュージアム

〒690-8504 松江市西川津町1060

電話 (0852) 32-6496

印刷 株式会社報光社
